

日本と京都によろこそ：実行部隊の3400日

Welcome to Japan and Kyoto: 3400 days of Executive Members/Committee

吉田 英生 (京都大学)

Hideo YOSHIDA (Kyoto University)

e-mail: sakura@hideoyoshida.com

1. 多様な注文に応え発展する老舗レストラン

IHTC-15をレストランに例えてみよう。まず組織委員会は経営陣。国際科学委員会は、世界から優れた食材を厳選して取り寄せご馳走をつくるシェフと厨房スタッフ。実行委員会はそのレストランの内外装を飾って雰囲気盛り上げ、食欲をそそるメニュー冊子を作成し、食器や音楽にも気を配っておもてなしをする最前線。

笠木組織委員長の東京オフィスをheadquarterとして、仙台・九州を中心とする国際科学委員会と京都を中心とする実行委員会とが緊密な協力のもと全日本で臨んだのがIHTC-15であった。三つの委員会は、世界からの多様な注文に応え、なおかつ和風の味も活かし、老舗の伝統を守ると同時に次世代に発展する萌芽も育てる—このようなレストランにしたいと願った。京都に軸足をおく実行委員会が、プログラム冊子の表紙を日本を代表する富士山に選んだのも、そのような思いがある。

2. 準備に要した3400日と最後の100日

会場となる京都国際会館を押さえたのが2005年6月、翌2006年8月のIHTC-13中の国際伝熱会議アセンブリー (AIHTC) 会議で招致に成功したところが最初の作業ピークであったが、実行委員会を正式に組織し仕事が本格的にしたのは遅い(第1回委員会は2013年1月8日)。客がテーブルについて注文を伺い、料理を届ける時が出番だからだ。会議準備全体では9年前から約3400日の長丁場となるが、最後の100日あまりの仕事はかつて経験したことのない多様かつ多量のものであった。とりわけほとんどの情報を共有した京都大学事務局 (吉田英生・岩井裕・齋藤元浩・巽和也・上阪彰子) では、送受信するメール数が300通程度になる日も少なくなかった。展示担当 (京都大学：功刀資彰・横峯健彦)、登録担当 (神戸大学：鈴木洋・川南剛・日出間るり)、会場担当 (京都工芸繊維大学：萩原

良道、京都大学：松本充弘、関西大学：梅川尚嗣、同志社大学：稲岡恭二)、写真担当 (関西大学：松本亮介)、さらにJENECONやYRM担当 (委員名は当該記事参照) も含めて、感謝は言葉では言い尽くせない。

3. 全オーラルセッションへの回帰

IHTCでは論文発表数の増加に伴い、IHTC-6 (1978) のラポーター方式を経てIHTC-7 (1982) からポスターが定着したが、これをもっと発信性が高く緊張感も伴う全オーラルセッションに戻すことを2010年のAIHTC会議を受けて最終決定した。この結果、計730編を越える発表を正味4日半の会期に収めるため、一般セッションは最大12室、キーノートセッションも最大6室の平行とせざるを得なかった。中日13日午後のAIHTC会議では、キーノートセッションだけでも録画してあとで聴けるようにする改善案も出た。

このような多数平行の条件下で、注目した講演をせめてわかりやすく把握し聞き漏らさないよう、プログラム冊子の表示および各室の完全同期進行の確保には関係者の智恵を寄せ集めた。

4. 少しでも日本の理解増進と威信回復のために

IHTC-5 (1974) 以来40年ぶりにわが国で開催される今回は、日本を理解いただく絶好の機会でもある—「富士山、芸者」といったステレオタイプからの脱却。また、2006年8月の招致時には思いもよらなかったことであるが、2011年3月の大震災とそれに伴う原子力発電所事故で傷つき、さらには不正確な報道で傷つけられてきた日本の威信を少しでも取り戻したいとも個人的には願った。誇りをもって思い起こしていただきたい。時速300キロ近い高速鉄道を5分間隔で秒単位の正確さで、かつ50年間も安全に運行できる国は世界の他のどこにありうか。IHTC-15もその延長線上でありたいと

願った。

そこでプログラム冊子 (http://www.ihtc-15.org/PDF_file/IHTC-15%20Conference%20Program.pdf) には、「熱」などの漢字の成り立ちを通じて日中韓3国の共通性なども強調したし、日本が生んだ偉大な科学者や文学者の言葉や古典の三大随筆なども、ごく断片に過ぎないとはいえ紹介した。日本人の世界平和と繁栄への決意を象徴するものとして国会図書館の「真理がわれらを自由にする」も引用した。そしてそのような知のおもてなしこそ、国際会議での重要な一側面と考え、プログラム冊子の編集は5月上旬から7月下旬まで実行委員会が最も力を注いだ仕事の一つであった。

幸いにも4年後のIHTC-16は北京での開催である。ぜひこの好機をうまく利用して日中韓そして台を中心とするアジアのさらなる飛躍にもつなげたいと願う。

5. 想定外だった京都国際会館の工事影響

築後約50年になる京都国際会館が、耐震工事を今年度中の完成に向けて行うことは以前から聞かされていた。ただ、正面玄関や庭園に面したレストラン「スワン」外側に無骨な足場が設置され、さらにロビーも圧迫されることが判明したのは開催まで2ヶ月あまりの5月末であった。これには関係者一同驚愕し、会館側に最大限の対応を求めた。その後の会館側の協力努力もあって、結果的に正面玄関は京都らしさをデザインしたシートで覆われ、スワン外側の足場も会期中は外され、ロビーの圧迫もまずまず軽減されたが、開催間際でのこの件だけは9年間の準備の中で強いストレスを伴ったものとなったことは否定できない。

6. 人と人とのつながりと一所懸命

陳腐な言葉でいまさら申すまでもないことかもしれないが、今回なによりも感じたのは、人と人とのつながり、そして一つの目標のために各自がそれぞれのパートで誠実に一所懸命仕事をしていただける尊さ・ありがたさである。これはまさにオーケストラが合奏している姿と重なる。このような感謝の気持ちを忘れないよう、プログラム冊子を編集中、早い段階からお世話になった方々のお名前を書き留めるようにした。委員会メンバーのように名前が明示されない貢献者は、冊子の

最後にEnd-Credit Rollsとしてまとめさせていただいた。その数は約200名に上る。さらに、匿名の全世界の論文査読者は何百名にも達するだろう。

7. ビザと難民

最後に、会議終了後にガツンと殴られたような思いをしたことを付記させていただく。日本入国に際してビザの必要な参加者に対応するのは実行委員長の役目である。今回、一定の基準をクリアした参加希望者にはビザ申請に必要な書類一式を郵送した（同伴者分を含め333名分）。それらの中で、事前登録締切間際に、ある国の仲間どおしと思われる計20人以上が、？と思われる参加登録をしてきた。論文発表はないし、後になってカードの不正使用が強く疑われることが判明した。その中で1人だけ、われわれのチェックをすり抜けて日本までやってきたが、当方からの電話連絡により大阪入国管理局（住之江区南港）で何とか入国を食い止めたケースが発生した。実行委員会としてはやれやれと思っていた8月末、難民を救済するボランティアの方が入国管理局に保護されていた当人と会った後、事情を聞いてこられた。その方のメールを少し長くなるが引用しよう。

「いろんな国から日本に難民が来ており、難民申請する人が昨年は3260人に上りました。日本は難民条約に加盟しているにもかかわらず、難民認定基準をとんでもないくらい厳しい運用をしており、昨年はなんと難民として認められた人は6人です。率にすると0.2%と先進国では恥ずかしいほど低いのです。認定率が50～60%に達する米国を別格としても、欧州諸国では8%から30%くらい認定しています（絶対数もまったく多い数字です）。韓国でも10%くらい認定しています。これを仕切っているのは入管ですが、要するに「怪しげな外国人は入国させない」という方針で、証拠を出してもほとんど却下されます。このような日本の方針は、国連内でも問題となっており、いくつかの人権関係委員会から日本政府に是正勧告がなされているのですが、日本政府は改善しようとしません。たまたま日本に来てしまったために難民として認定されず、刑務所のような収容所に収容される人たちを救う必要があると思っています。多くの弁護士の方々も、支援していただいています。日本は全く開かれた国ではありません。Xenophobiaがそのまま国家方針となっているような国です。本件につきまして、たまたま私が大阪入管で面会をしたのですが、ご説明いただいたことを踏まえた上、更に詳しく迫害状況などをヒアリングし、サポートするかどうかを決めたいと思います。一人ひとりの人生、命にかかわることですので、どうかご容赦いただきますように。」

「正すべきは正さないとはいけません。本当に命からがら逃げる際には、不正なことをしてでも（例えば、偽のパスポートをブローカーから買ってでも）、国外に逃れようとするのが難民だということもご理解いただけるとありがたいです。」

会期中多くを学んだつもりでいたが、このご指摘には思いもよらなかった。自分はやはり「見たいものしか見ていない」のだった。（文中敬称略）